

“笑顔”つなぐ

はままつの

ユニバーサル農業

スズキ果物農園

鈴木隆広



上：浜北区で営むスズキ果物農園のみかんはオリジナルブランド「たかのみかん」の名称で親しまれている。

下：今年経営を継いだばかりの隆広さんは、従業員として働いていたころから障がいのある方と共に汗を流してきた。

profile

浜松市浜北区宮口で果樹生産を行うスズキ果物農園・園主。「たかのみかん」「たかの梨」「たかのベリー」など、たかのブランドを展開するほか、ジュースやジャムなど加工品の生産も行っている。2016年1月より経営を引き継ぐ。

■スズキ果物農園での障がい者雇用のはじまり

当園は、浜北区でみかん・梨・ブルーベリーなど果物の生産を行う農園で、老若男女約20人が働いています。経営理念は、「食を育み、共に育つ」。農業を通して食を学び、人と人、人と自然の豊かな繋がりを求め、より良い暮らしを共に築ける農園を目指しています。

当園では、主に収穫作業などを障がいのある方をお願いしています。特例子会社の㈱ひなりさんへの作業委託が中心となっていますが、作業をお願いする量は年々増え、それに伴い農園の規模拡大にもつながってきました。

私は今年の1月に父から経営を引き継ぎましたが、障がい者雇用について検討をはじめたのは父の代からです。福祉施設から何か農

作業がないかと頼まれたことがきっかけで、はじめは草取りのお願いをしていたそうです。次第に、障がい者のみなさんが色々なことができるということが分かってきたことで、収穫などの農作業もお願いするようになってきました。

農家の私たちにとって、特に収穫期などはいくら人手があっても足りないくらいです。こうした課題の解決のため、静岡県西部地域の農業経営者たちが集まる「浜名湖アグリフォーラム」という組織の中で障がい者雇用がテーマとなり、農作業の受入れの調査を当園で実施したことが本格的な受入れのきっかけになりました。その後、父と母で他県への視察なども行い、受け入れの形について研究を行っていたそうです。

その当時、従業員の一人として働いていた自分にとって、最初はやはり戸惑いがありました。何も

知識がなかったので、どう接していいかわからなかったというのが正直なところでした。ただ、実際に働いてみれば普段の色々なコミュニケーションをとっていく中で、自分を含め他のパートさんたちもすぐに慣れてきました。こういうことに注意してあげる、こういう言葉をかけてあげるといい、というようなことも分かってきて、自然にそういった配慮をし合う環境ができてきました。

■ひなりを中心とした農作業委託

現在、ひなりさんにみかんやブルーベリーの収穫を作業委託しています。農園として計画している量を委託し、きっちりとその分量を収穫していただけるので、急な休みなどがどうしてもあるパートナーと比べて計算が立ちます。経営の中でもしっかりと見込みを立ててにして新たに農地を借りるなど農園の規模の拡大にもつながってきました。

ひなりさんへの委託に関しては、自分は収穫の仕方や農産物の

扱いなどをアドバイスするだけで、あとは基本的にサポートマネージャーの方に任せています。また、製品化しているジュースやジャムのラベル貼りやお菓子の袋詰めなどを福祉施設の障がい者さんにもお願いをしています。みなさん丁寧に作業してくれます。

農園の中ではパートさんたちもうまくサポートしてくれています。細かい部分で言えば、例えばみかんの収穫では、なるべく獲りやすい場所を障がいのある方に回してあげたりといったことですね。その他にも、農園の中に生まれてきた変化は色々あります。

■農園の中で生まれた変化

農園の中であった変化の一つに、ブルーベリーを収穫する際のカゴがあります。果実の収穫の際、採った実をA品とB品に分ける作業はそれまで間仕切りのある一つのカゴを手持ってやってきましたが、新たに腰に付けるカゴを用意したことで、『手に持ったカゴ』と『腰につけたカゴ』とを明確に指示ができるようになりました。



左：高所での作業や、細かい作業を必要とするみかん果実の二度切り（実から出た茎を根元で切る作業）も難しくこなす。
 右：従業員みんなで考えて製作した、ラベル貼りのための治具。ジュースやジャムなどのボトルへのラベル貼りを均一に、効率よく行うことができる。



委託する作業については、まず農産物の特徴や取り扱い方について細かく教える。農産物のことをしっかりと理解してもらうことが大切。



妻・真由美さんは元々福祉施設に勤めていた経験を持ち、良きアドバイザーでもある。

また、ルール化やマニュアル化ということも次第にできてきました。例えば、畑の中にとどこころ危険な切り株や大きな石などがあつたり、または絶対に踏んではいけないホースがあつたりします。自分たちだけが作業するのならば、頭の中に入っているの、これらを気にしながら作業をするのですが、障がい者さんに分かるように危険な箇所を避けた通り道を作つて、この圃場ではここを通るということをルール化しました。すると、パートさんたちも含めみんなが守るルールになり、圃場の危険が防げ、作業の指示もしやすくなりました。明確に指示ができるように形を少し変えることで、ルール化やマニュアル化ができるようになり、安全性や効率性を高めることができるようになったのです。その他のことに関しても、文章化したり、行程表を作つたりという習慣が少しずつできってきました。こうしたことは、経営者としての自分にとつても、例えば新たに規模拡大をする場合に誰もが作業しやすい圃場の整備を考へるきっかけになっていると思ひます。

貼るラベルについても変化がありました。タブの正反対の位置に貼ることや、同じ高さに合わせることは健康者にとつても意外と難しいのですが、これまでは感覚と経験でやりくりしてきました。これを障がい者さんが作業できるようにするため新たに治具を作り、タブの位置を下に固定してその上面にシールを貼る、高さはびんと張つた糸を上辺に合わせて貼るといふ指示のできるものになりました。今はその治具を改良した2代目になっていて、みんながやりやすい道具になっています。

■地域に根付いた農業だからその役割を

現在は、お互いが配慮してあげられるいい職場環境ができています。自分にとつて始めはあつた戸惑いも今はもうほとんど感じることはなくて、なんとか自然に配慮して、自然に接してあげられていると思ひます。

また、障がい者のみんなにとつても農業に関わることは嬉しいようで、例えば自分が作業に関わつたものが店頭に並んでいたります。

と喜んでもらえて、あのお店で売っているの見てきたよ！なんて声をかけてくれます。そんなところも自分にとつて嬉しいことです。とはいえ農作業に関しては、向き不向きもあります。ちゃんと適性を見てあげることも必要です。し、接し方の配慮なども必要ですので、福祉の専門家にもお願いする部分もあります。そうした機関へつなげたりといったことも、地域社会でカバーができることではないかと思ひています。

昔はあまり聞くこともなかった引きこもりといった言葉も、最近

はよく耳にするようになってきました。地域の中にはそういうことで苦しんでいる方も多くいるのではないかと思ひます。地域に根付いた農業だからこそ、地域の中で果たせる役割もある。何かしら障がいを持った方が、私たちの農業を通して社会復帰につながればいいですね。

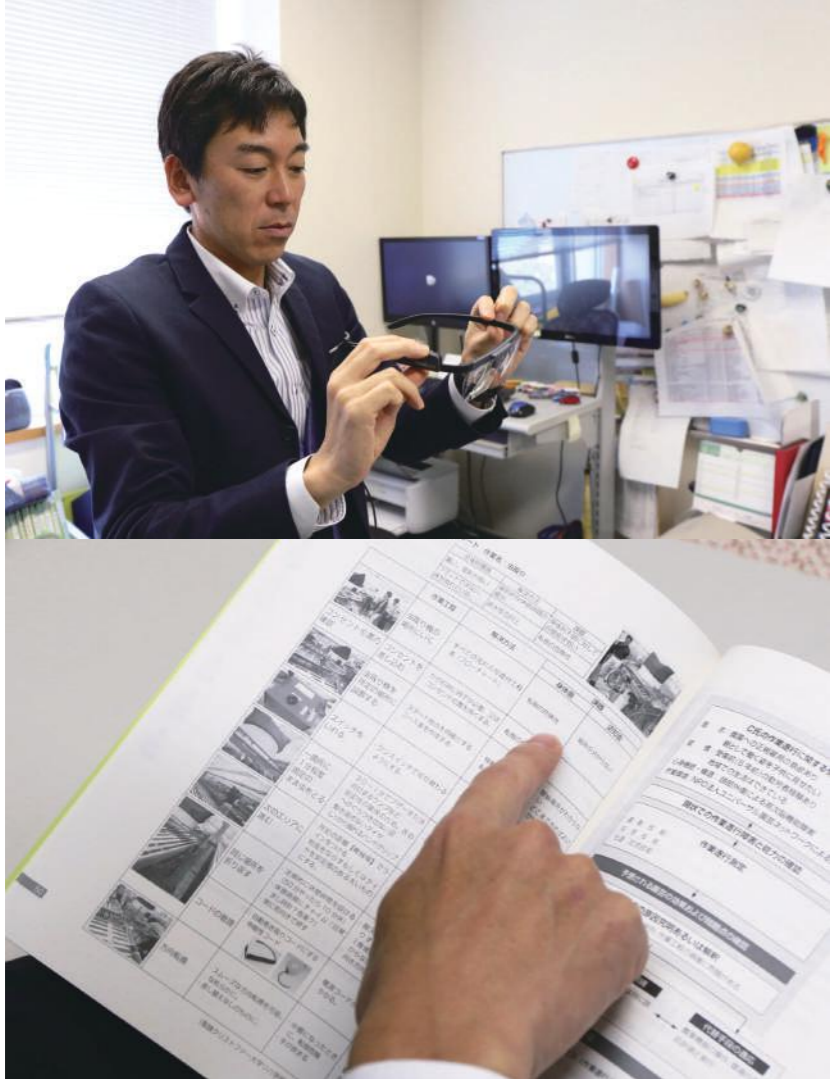
“笑顔”つなぐ

はままつの

ユニバーサル農業

聖隷クリストファー大学

建木健



上：現在、研究室ではVR（バーチャルリアリティ）を活用した自動車運転の可否判断に関する研究も行っている。

下：虫とり機の製作については書籍でも紹介される事例となった。

profile

聖隷クリストファー大学リハビリテーション学部作業療法学科助教として、主に高次脳機能障害のリハビリテーションの研究を行う。(公社)静岡県作業療法士会・理事のほか、NPO 法人えんしゅう生活支援 net の理事長として NPO の運営にも携わり、研究と実践活動を通して農業・福祉・医療の連携に取り組む。

■聖隷クリストファー大学とNPOでの活動

聖隷クリストファー大学は、医療・福祉に関する学問を学ぶ大学です。私はここで、リハビリテーション学部作業療法学科に助教として所属し、主に「高次脳機能障害」という障害に対するリハビリテーションを専門分野に研究しています。高次脳機能障害とは、あまり馴染みのない言葉かと思いますが、脳の損傷により、身体の機能は保たれているのに脳の精密な情報処理や指令がうまく行えず、生活や仕事で困難を生じる障害のことを言います。事故や病気などが原因で起こる障害で、周りからは健常者とそれほど違いがないように感じられるのですが、段取りや手順を効率良く行えなかったり、怒る・悲しむ・喜ぶなどの感情が目立つ感情失禁、また記憶障害など

が主な症状にあり、全国に約30万人いると言われています。こうした障がいのある方がリハビリテーションを通して少しずつ機能を回復し、社会復帰できるための研究をしています。また、研究だけではなく実践的な部分まで補えないことから、NPO法人えんしゅう生活支援 net という法人を立ち上げ、障がいを持った方のリハビリと活動の場を作っていて、そこで農業・福祉・医療の連携をテーマの一つにしています。具体的には、NPOとして「ワークセンター大きな木」「ワークセンターふたば」という大きく2つの事業を行っておりまして、「大きな木」では自分たちの畑を持ち、そこでジャガイモ、大根、玉ねぎ、にんにくなどいろいろな作物作りを、障がいを持った利用者さんにもリハビリとして行ってもらっています。また、「ふたば

では中区中央にある「LaLa Cafe」というカフェを運営していて、畑で作った野菜を使ったカレーなどのメニューを提供しています。カフェでも障がい者の方々に料理や販売などに携わってもらっていて、こうした色々な作業を通して、実践的な就労プログラムを行っています。

私は医療という立場で農福連携に関わらせていただいています。が、園芸福祉や園芸療法といった言葉もあるように、リハビリテーションの視点においても農作業には、例えば認知力・判断力の向上、両手動作や目と手の協調運動、斜面での歩行訓練や立ちしゃがみなど、たくさんの効果的な訓練要素が含まれています。

■人を活かす機械の製作をきっかけに

浜松市のユニバーサル農業に関わるようになったきっかけは、以前、京丸園さんから「虫とり機」の製作について相談を受けたことが始まりです。水耕栽培している作物の上に大きな車輪が付いた掃除機のようなものを手で移動さ

せ、害虫を捕る機械をオーダーメイドで製作するものでした。一般的に企業が機械を製作するといった場合、人手を減らし効率化を図るために行うものですので、依頼を受けた製作会社さんとしてはできるだけ自動化できる機械を設計するという発想になります。一方、京丸園さんとしては障がい者が扱う前提の機械、つまり人を減らす機械ではなくて人を活かす機械を作りたいという要望でした。そこで大学のリハビリテーション学部で声をかけていただき、障がい者にとって扱いやすく、また同時にリハビリの効果も得られるものを作ること、産学農の共同により作りました。具体的には、作業工程を細かく分解して整理し、なるべく工程をシンプルにしたり、障がい者のゆっくりに合わせたベースに合わせた回転軸にしてブレーキを設けるといったことをしたのですが、製作会社さんとしてはわざとゆっくり動く機械を作るなんてことはなかなかないということでした(笑)。経営の中で導入する機械ですので、作業効率や製作コスト、そして作業者の訓練要素がバランスを崩さないよう形にすることが大切で、自分



左：「ワークセンター大きな木」では、畑も機具も自前で調達。農作業における訓練的な要素も重視しながら色々な野菜を作る。今年の冬はサツマイモ、ダイコンなどを収穫した。

右：妻・良子さんが所長として運営する「LaLa Cafe」（中区中央）では、「大きな木」の畑で採れた野菜を使い、カレーやパスタなどの料理を提供。地域住民の憩いの場となっている。



農作業は、リハビリテーションの視点からも多くの効果的な訓練要素を含んでいる。また、目に見える成果を実感できる点も特徴。

にとってもリハビリのための農作業を改めて考察する機会になりました。

■ユニバーサル農業から生まれた現在の研究

こうしたきっかけをもとに、現在、「障がい者の農業参画に向けた農作業工程管理カルテ」という研究をひとつ進めています。農業者にとって障がいを持った方を雇うというにはある意味、未知の部分があります。そこで、この研究では、障がいを持った方の機能・能力をそれぞれ個別に分析し、何ができないかということ数を数値化します。一方、同じように農作業ひとつひとつの作業を分析し、例えばチンゲンサイの定植や玉ねぎの箱詰めにはどんな機能・能力が必要かということを数値化します。最終的に、これらをマッチングして、この人にとってこの作業の適性がどの程度あるかという数値を算出していく、といったことをしています。

多くの事例の積み上げが必要になりますし、形にするにはまだまだ時間がかかりますが、障がいを考えた方だけでなく、障がいのある方が社会に出てどのように働いてくかという視点が重要だと思っています。研究で良い結果が出たというだけでなく、社会や産業の中で効果的に機能する形、事業で言えばしっかりとしたビジネスモデルになるということを考えていかなければいけません。そういう意味で、実践的なNPOでの活動にも色々として取り組んでいるところではあります。

福祉と医療というのは近いようで意外と切り離されがちなところがあります。そこを様々な研究や

持った方の農作業に対する適性を客観的に数値化することで、目に見えない不安や経営リスクを解消するひとつのツールになると思っています。また、リハビリの面においても、どんな作業が望ましいとアドバイスができるようになる。この先もいろいろな方の協力が必要なことですが、なんとかいい形にできるといいですね。

■これからの社会、これからの農福連携のために

近年、農福連携という言葉がさかんに聞かれるようになってきました。浜松では農業と福祉、また企業との連携も生まれています。そして、私たち「医」との連携も大切なキーワードだと思っています。障がいのある方にとって働くということはすごく重要なことで、福祉施設での訓練ではなかなか気が入らなかった方が、雇用されて賃金をもらう立場になることで、大きな責任感を持つてはつらつと働くケースをたくさん見てきました。これからもそういう後押しができるためには、研究という場で

活動を通してシームレスにしていることが、自分の役割だと思っています。病院や福祉施設という枠を超えて、障がいのある方がはつらつと働いている社会。農業・福祉・医療の農福医がより良い連携をつくりあげていくお手伝いを、これからも続けて行ければと思います。



取り組みを身近に感じてくれている学生たちの存在も大きい

“笑顔”つなぐ

はままつの

ユニバーサル農業

まるたか農園

鈴木 崇司



上：ハートのマークが入ったオリジナル商品「ハビフルトマト」の開発など新しい取り組みも積極的に行っている。

下：元気な挨拶や趣味の話など、日々のコミュニケーションが農園の明るい雰囲気づくりにつながっている。

profile

浜松市北区都田町で、中玉トマト、ミニトマト、梨の生産を行う「まるたか農園」を運営。自身のアレルギー体質による経験から、健康へ配慮した有機肥料を中心とする土耕栽培を行う。平成27年度静岡県ふじのくに未来をひらく農林漁業奨励賞を受賞。

■近年、規模拡大を果たしてきたまるたか農園

当園は、北区都田町でトマト・ミニトマト・梨を生産している農園です。健康な食材を通じて食生活を豊かにすることや身体の健康に貢献すること、また食育を通じて未来を担う子供たちが豊かな人生を作るお手伝いをすることを経営理念としています。

農園では私のほか従業員1名、パートさん5名と両親が働いていますが、そのほか作業委託として主に特例子会社の㈱ひなりさんへ収穫作業をお願いしています。ひなりさん以外にも作業を請け負ってくれる福祉施設に除草作業をお願いしたり、果実ジュースの加工販売している施設にトマトを卸すなど、地域内の福祉分野の方々と何かと連携をさせていただいています。

■ひなりとの連携のはじまり

ひなりさんに農作業をお願いするようになったのは、ちょうど4年ほど前からになります。

もともと当園ではパートさん2名を雇って中玉トマトの生産を行っていましたが、そんな頃、新たに畑を借りてミニトマト生産で規模拡大をしないかという話がありました。せっかくのお話ではあるものの当時のうちの労働力では

難しいと思い、お断りする方向で検討していたのですが、ちょうどその時に農作業受託をしているというひなりさんを紹介してくれる方がいて、試しにミニトマトの収穫をやらせてみてくれませんか？という提案もあり、試験的に圃場の一部で栽培と収穫を行うことになりました。正直、最初は障がいのある方に収穫の作業ができるかな？という気持ちがありました。

それまで障がい者さんと関わることはほとんどありませんでしたし、どの程度の作業ができるのかが全く分からなかったのです。実際にお願ひしてみても、本当に助かったというのが率直な感想です。当初は、収穫適期の実とそうでないものの判断が難しいところもありましたが、サポートマネージャー（障がい者スタッフと共に来て作業の管理をしてくれる健康者）とともに客観的に識別しやすい方法を検討するなど色々と工夫をしていく中で、だんだんと慣れてきました。作業の内容や計画などについては、全てサポートマネージャーと話をしています。計画した作業量をきっちりとしてくれま

すし、その日にあったことや数値的なことなど、細かな部分も報告

してくれるのでとても助かっていきます。ひなりさんの障がい者スタッフは、みんなまじめでまっすぐです。ときばきと仕事をしてくれま

■農園の中で起こった変化

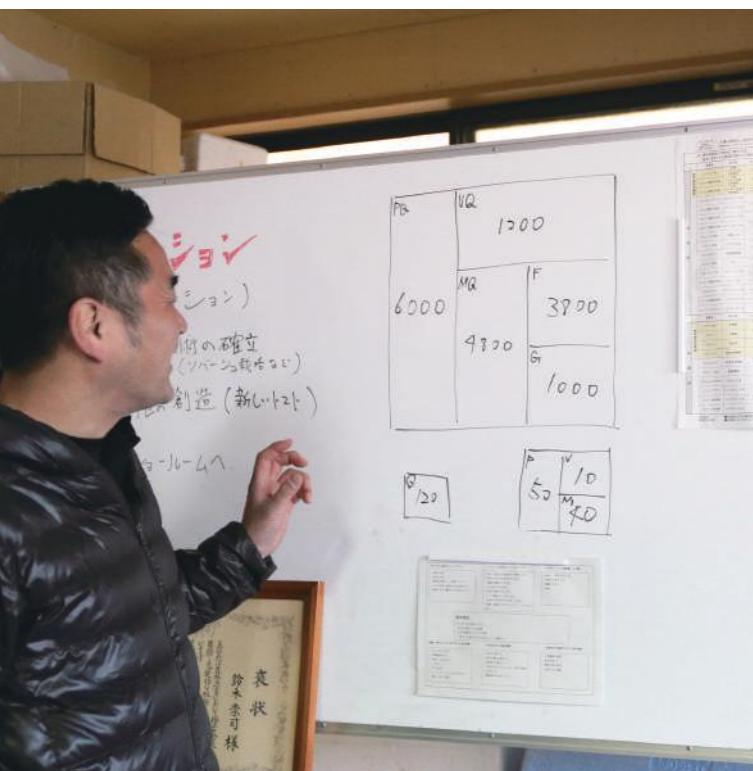
ひなりさんの提案から、農園に変化のあったこともあります。ひとつは、作業している人の名前を書いた看板を列の入り口につけるようになりました。この人がここまでやっているか誰かが分かるようになり収穫作業が効率的になったのですが、こうしたことは簡単



左：4年間でトマトを生産するハウスは2倍となり、新たな販路の開拓にもつながった。
右：サインの設置や通路が広くなるなど、誰もが働きやすい圃場へと変化してきている。



農作業を委託する農業者として、作業の管理を全てお願いできるサポートマネージャーの存在が大きい。



地域の農園としての役割を果たしていくことも、経営意欲のひとつとなっている。

4年前、5反(約5千㎡)だった栽培面積も、現在2倍となり、今も規模拡大を計画しています。農園で障がいのある方の受け入れをしていると、時には社会貢献のような視点で反響をいただくこともあるのですが、正直、僕自身は福祉のために何かをしているという意識は全然なくて、ただただ皆さんのおかげで今の仕事ができているのが率直な気持ちです。こうしたことにお返しするためには、なるべく一年を通してお願いできる仕事を作らなければいけない。今は助けてもらっている一方で

が、今後も規模を拡大し作業を作り出していくことが、お返しに繋がるのかなと思っています。これからも、この農園で働いてくれるみんながそれぞれの力を発揮してくれること、そうした力を借りていくことで、地域の農園としての価値が高まっていけば嬉しいですね。

なことのようにでなかなか自分たちでは気付かなかったことです。今はパートさんにも同じように看板をつけてもらい、農園全体で実施しています。それから、通路を広くとるようになりまして。これまでは自分だけが作業することを考えて圃場を作ってきましたが、誰もが作業のしやすい環境整備を意識するようになったことで、障がいのある方にも、パートさんにも、また自分にとっても良い環境の農園になってきていると思います。また、ひなりさんをお願いするようになった頃から、新たに作った販路もあります。通常、ミニトマトはへたがついた状態で出荷するためへたを残して収穫するのですが、少し技術を要するので収穫作業のネックになっていました。これは、障がいのある方の作業に限った話ではなく、パートさんが作業する場合でも同じように神経を使う部分でした。そこで、へたを取った状態で出荷できる販売先も新たに確保しました。今は収穫者や販路によって収穫物をコントロールできるようになり、良いきっかけになったと思います。

安全性とおいしさにこだわった農産物を作りたいという想いで就農した当時、僕はトマトを作ることに全てを自分でやらなきゃいけないと思っていました。それが、ひなりさんとの連携をひとつのきっかけとして、誰かにお願いできる、助けてもらうことができるんだということが分かってきました。やはり、人それぞれで得意なことと不得意なことがあります。それは障がい者の方に限ったことではなく、パートさんや、自分自身のことについてもそう。僕よりも、障がい者スタッフさんやパートさんのほうが上手にこなす作業もあります。だから、今はそういう皆さんが働くこの農園をどううまく回るようにするか、ということに意識が向くようになってきました。作物作りに関しても、以前はとにかくおいしいトマトを作るといふ事だけを考えていましたが、今はお願いする仕事を作りだすことや、より良い職場環境を作るといった、広い視点で農園のことを考えるようになってきていると思います。

■農業経営者としてのこれから